2024年4月28日発行

聖アンデレ教会　教会報

さかえ

第　382　号

日本聖公会東京教区　聖アンデレ教会
〒105-0011　東京都港区芝公園3-6-18
TEL 03-3431-2822　FAX 03-3434-5698
www.st-andrew-tokyo.com

発行人：牧師 司祭ステパノ卓志雄
編集人：ヨハネ柳生義人
セバスティアーノ林圭佑

はじめまして。「卓」です！

牧師 司祭 ステパノ 卓志雄

はじめまして。卓志雄（たくじょうん）と申します。韓国ソウル出身で一九九九年から東京で過ごしています。清瀬聖母教会で聖職志願をさせていただき二〇一〇年司祭按手を受けました。今まで旧練馬聖ガブリエル教会、旧東京聖マルチン教会、旧池袋聖公会、阿佐ヶ谷聖ペテロ教会、インマヌエル新生教会等の牧会、教区事務所宣教主事として勤務しました。現在管区事務所の宣教主事として働いていますが、二〇二四年四月より聖アンデレ教会牧師および渋谷聖公会聖ミカエル教会管理牧師として任命されました。

執事按手の時も、司祭按手の時も、そして聖アンデレ教会の牧師として任命された時も考えました。「わたしは神様に仕える器としてふさわしい者であろうか」と言う問いかけについてです。

その時『わたしは道具にすぎません。神の手のひらのなかにある小さな鉛筆のようなものです。わたしたちのような弱くて不完全な道具を使うことで、神はいまでも謙遜を示しておいでです。』というマザー・テレサのお話を思い出し、次のようなことに気づかされました。『神様はこの世を掃除するために様々な道具を用いる。綺麗で性能がいい物もあり、汚い物もある。また古くなってギザギザになって使い物にならない物もあるだろう。しかし神様の腕は非常に優れて掃除道具の性能や状態に関係なく、世を綺麗に掃除してくださるのである。また窓掃除、床掃除など必要なとき必要なものを上手に使ってくださるのである。』

わたしは人間的に見るとふさわしくない者かもしれません。しかし神様は教会という信仰共同体を通してわたしをお選びくださったと思います。神様の掃除の器として。わたしは黙々と誠実に仕えさせていただきたいと思います。これは聖職だけに当てはまる話ではないと思います。キリスト者には神様からそれぞれ豊かなタラントが与えられています。わたしたち一人一人がそれを用いて、それぞれのところで神様に仕えたいと切実に願うばかりです。

もう一つだけ申し上げます。わたしの名字は「卓」です。韓国では珍しい苗字です。いつも名前を聞かれると「卓球」の卓、あるいは「卓越」の卓と説明しますが、相手が分からない表情をすると「テーブル」、「食卓」の卓であると説明します。やっと分かってもらいます。「卓」といった「テーブル」はキリスト教において非常に大切なものです。聖アンデレ教会の皆さんと聖「卓」を囲んで共に祈り、食「卓」を囲んで共に交わりを深め、座「卓」で話し合いながら教会のこれからの歩みを共に考えていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

ご挨拶

「祈り、働け、楽しくやろう」

司祭　フランシス下条裕章

聖アンデレ教会での働きを振り返ると、対応を考え工夫し、働き続けたあっという間の五年間という感じがします。コロナ対応でこれまでの様々な活動が制限される事態となりましたが、必要は発明の母よろしく、ネットの活用や教会諸施設の新しい用いられ方など、これからの活動に有効なツールを教会が手に入れることとなった時でもありました。

「楽しくなければ教会ではない」という言葉がありますが、それは教会が楽しいことを選んでするという意味ではありません。私たちの主イエスが教会に託された宣教の使命を如何に楽しみつつ成し遂げてゆくのかということです。まず宣教という使命が与えられており、それを成し遂げるために、祈り、働きを通して、それを楽しんでゆくのです。それこそが神の民・キリストの教会のようです。

全聖公会は、宣教の使命を五つの指標として表現しています。①神の国のよき知らせを宣言すること、②新しい信徒を教え、洗礼を授け、養うこと、③愛の奉仕によって人々の必要に応答すること、④社会の不正な構造を改革し、あらゆる暴力に反対し、平和と和解を追求すること、⑤被造物の本来の姿を守り、地球の生命を維持・再生するために努力すること。

牧師としてみなさまとともに祈りつつ働きつつ楽しく過ごさせていただいたことを、心から感謝しています。そしてこれからも聖アンデレ教会の宣教の働きがますます祝され、喜びに満ち満ちたものとして育まれてゆきますよう祈念いたします。

感謝

共に歩んだ四年間に感謝

執事　スザンナ中村真希

聖職候補生として勤務を始め、丸四年間お世話になりました。あいにくのコロナ禍ではありましたが、その分ゆっくりと聖アンデレ教会の皆さんと出会うことができたと思います。ある意味ではすでに与えられた役割や業務をこなすのではなく、まっさらな状態で何ができるか？を考え、一緒にやってみることができた時間は、チャレンジではありましたが、私にとっては大きな喜びと学びの時間でした。海外での学生生活が長かった私の、時に非常識だったり世間知らずだったりする至らない部分を受け止め、自由にさせてくださった指導司祭の下条先生と、温かく受け入れ見守ってくださった聖アンデレ教会の皆さんに心から感謝を申し上げます。

聖アンデレ教会は、東京教区の中でもたぐいまれな、たくさんの「資源」を持った教会だと思います。自分たちの歴史だけ見るとどんどん足りなくなっている、できなくなっているという教勢衰退の危機を感じている方も少なくないかと思いますが、実は全くそんなことはなく、人も、場所も、物も、資産も、本当に豊かにあって、色々な可能性を秘めていると感じます。かつて聖アンデレ教会は南東京地方部の拠点教会として、地域の奉仕活動や、教育活動、人材の育成などを行い、他教会や地域を助けたり、別の教会を設立したり、と当初から「他者のためにある教会」でした。与えられている「資源」をいかに活かしていくか、それは本当に一人一人に委ねられている大切なミッションです。宣教一四五周年を迎える今年、聖アンデレ教会の宣教奉仕の働きがますます発展していくことを、今後は東京教区の同志として応援し、祈り続けたいと思います。

イースター

イースター報告

マルタ村田信子

今年の復活日は初夏のようなお天気に恵まれ、コロナ対策も和らぎ、また下条裕章司祭、中村真希執事の聖アンデレ教会司牧の最後の日でもあり、多くの方々と共に主のご復活をお祝いすることができました。（七時半二六名、一〇時半一三四名、一三時半一六〇名、一七時四八名）復活前主日には今年も聖オルバン教会と合同で棕櫚の行列が行われ、教会の庭の一角には子供たちの力作のイースターガーデンもできあがりました。聖なる三日間の礼拝も守られ、主イエス様のご受難とご復活を深く心に刻みました。復活日の一〇時半の聖餐式では洗礼式、初陪餐が行われ、新しい仲間をお迎えできたことは大きな喜びでした。礼拝後、聖アンデレホールでは四年ぶりのイースター愛餐会が復活し祝会が持たれました。恒例の卒入学、成人のお祝いが行われ（合計二一名）、子供一人一人の成長ぶりに大きな感謝を覚える一時でした。後半は下条裕章司祭、中村真希執事への感謝の会がもたれ、信徒代表の感謝の言葉と共に教会からの感謝の品や花束が贈られました。子供たちからは感謝の言葉の詰まった色紙がプレゼントされました。両先生からは歌のサプライズがあり、ご一緒した期間を振り返りながら感謝の時を過ごしました。午後にはこどもとともにささげるイースター礼拝がボーイスカウト、ガールスカウトと共に捧げられました。礼拝後は教会の大人の方々による復活劇の熱演があり、最後にエッグハンティングも行われ、元気な歓声のうちに子供のプログラムは終了いたしました。午後五時からはコンテンポラリーミュージックによる礼拝が捧げられました。アンデレ教会では初めてのことでしたが、いろいろな賛美の形があることを改めて感じることができました。プログラムの大変多い復活日となりましたが、棕櫚の十字架作り、イースターエッグ（四四〇個）等、それぞれのプログラムに関わってくださった多くの方々に心より感謝申し上げます。

主の復活ハレルヤ

洗礼・堅信

いつも限りない光を

モエシャ梶原萌絵

私は二〇二四年三月三一日に洗礼を受けます。

私がこの教会を知ったきっかけは東洋英和幼稚園の入園です。その幼稚園はキリスト教の学校だったので、教会に通うことが日曜日の宿題でした。なので、私たち家族は「なんとなく」この教会に足を運ぶことになりました。最初はパパも人生初めての教会通いだったので、とても緊張していたそうです。それでもあっと言う間に教会の空気に溶け込めた、とパパも私も思いました。それは笹森田鶴先生、太田信三先生それから教会の皆様方が笑顔で私たちを受け入れて下さったからです。それから私も今日に至るまでさぼることなく、イースターもクリスマスもお祝いすることができ、教会に通うことが習慣となりました。

洗礼を考え始めたのは小学校低学年の時な気がします。そのときはパパやママから、「一〇歳くらいになって、きちんと自分で判断ができるようになるまで待とうね」とアドバイスを受けたのですが、それから予期せぬコロナ過に陥り、私たちの生活は一変しました。教会に通うことが難しくなって、さらには学校にも行けなくなるなど、私たちの生活は一変しました。でも、今思い出すと、ステイホームでYouTubeなどを見て新しい趣味や新しいエンターテインメントを楽しむことを覚え、また家にいても遠くの人を応援できるSNSなどの手段も普及しました。なので、コロナ禍も悪いことばかりではなかったのかも知れません。そして、少し遅くなりましたが今年のイースターに洗礼を受けることができます。それも下条裕章先生や中村真希先生それから教会の皆様方があたたかく導いて下さったからです。

洗礼名はモエシャ（Moesha）です。モーセと同じく、「引き上げられた」という意味があるそうです。皆様方のファミリーとして引き上げて頂いた、そんな気がします。

いつも互いに分け合い、喜び、想い合い、目一杯の光がある、そんなクリスチャンを目指したいです。これからもよろしくお願いします！

諸活動報告

長崎青年セミナーを終えて

ソフィア中村志穂

学生時代、世界史、日本史、丸暗記でテスト用紙に答えを書いてしまえばそれが最後、思い出すことなどあるはずもない日々。

私自身にも年季が帯びてきてなんとなく、そういったものに目が向くようになってきたこの頃。クリスチャンになって一一年目の私に長崎、という言葉だけでもずしりと重く分厚い資料を手渡されたかのような学びがやってきた。母は長崎出身、二歳で被爆している。当時の記憶はあまりないらしいが両親が被爆症による脱毛をしたことをうっすらと覚えているそうだ。

母が、私を産み「戦争」という言葉はとっくに過去のものになりつつある頃、私が癌になった。早期発見で命は取られなくても私の中で何かが変わりつつあるのが分かった。「これは（癌になったこと）一体なんだろう？」ストレスかもしれない、たまたまかもしれない、わからない。言葉が体の中で詰まり、モヤモヤが積もった。治療で放射線治療が始まり焼きただれてゆく皮膚にぼんやりと知りもしない戦争の匂いを感じるのだった。

放射線、核爆弾にもなるし医療で人も救うこれは一体なんなんだろう？母は被爆し、私は被爆二世。少なからずとも私は放射線治療で放射線を毎日浴びている事実。何だろう？わからない。

この疑問は私の最初の祈りだったかもしれない。それをイエスは聴いていたのだ。彼は聖書を通して私に新しい言葉を吹き込んだ。

「安心して行きなさい」

半年間で二度、長崎を旅した。教会メンバー、地元の方々、シスター達と様々なことを歩き回りながら話しあんなに苦手だった歴史が日常のように自分の中に入ってきた。時代背景と共に人々のうつろってゆく心が見えるようでそれでもキリストを捨てない人に私はなれるのかなぁ、と頭をよぎる。聖公会のルーツ、キリシタン弾圧、原爆どの時代の人々にも人による支配がありブラックホールのような不安が渦巻きそれでも心の種火の底に十字架がいるように見えた。想いは言葉になり、文字になり幾千の時が流れても私達に教えてくる。平和を求めなかった時代など、無いのかもしれない。良いものも悪いものもエフェクトする。一人ひとりのそれぞれの平和。他者に耳を傾けなければ、それはきっと思い込みの、一人だけの平和になってしまうだろう。

私が長崎で見て聞いて学んだことそれぞれがもつ資質をもって次の世代に継承してゆくこと。確実にそこでその人達が生きぬいたという事実が私達の今を作っている。人間だけが言葉を持つ。言葉はその人の歴史なのかもしれない。旅へ出てあらゆる人と話し出会った人の言葉を聞きながら自分の中の資質を深め良い言葉を世界へ放つことをイエスは見守ってくれてるはずだと信じて歩き続きたい。今回の旅は終了してしまったが何年経っても褪せずに私に語りかけてくれると思う。本当の家族にように語り合った教会の家族だった。

ガザ（パレスチナ）の現状

アンナ野口三保子

昨年一〇月七日、イスラエルへのハマスの奇襲攻撃は世界中に衝撃を与えた。これまでも幾度と無くハマスはイスラエルに攻撃を行っていたが一回で二二〇人余りのイスラエル人の死者を出した事は最悪のテロ行為とし世界中がハマスを批判。イスラエルは自衛の為に徹底的にハマスを壊滅させると表明。

しかしハマスがこの攻撃をした背景を批判する前に、イスラエル国家の設立に目を向けなければならない。現在の「イスラエル」は元々アラブ人（パレスチナ人）とユダヤが共存していた土地。一九四八年に「イスラエル」が設立される際、パレスチナ人は住んでいた土地を追われイスラエルの統治下「自治区」となるが、特に二〇〇七年に合意された合意声明以降、同じ税金を納めるも日常生活のライフライン維持に明らかに違法差別がされている。イスラエル人の住宅街は青々とした芝生の庭にスプリンクラーが回り、パレスチナ人住宅地区は水道管の破損等で水が出ない、電気も一日に何時間もの停電が日常化、道路の整備や生活ゴミ回収も十分に行われない。特にガザの住民はパレスチナ自治区内であっても行動の自由が阻まれ「天井の無い監獄」と言われている。世界で広く誤解されている「パレスチナ人はテロリスト」とは大変な間違いで、多くはイスラム教徒でアラーの神を信じ、神のご意向に添い生きている。Inshallah（インシャラ）

ガザの四〇代の知人は「どんなに祖国ガザを愛そうとも、子供達の今後の生活を考えると外国に出るしか無い」と言う。多くのガザ市民は爆撃され廃墟の中で生き延びても劣悪な避難所では満足な水も食事も不足、餓死寸前。一日を生きることが戦い、将来の見通しは全く立たない。限られた通信時間の中で家族の安否を確認するが、多くは悲しい知らせに感情が麻痺して行く。この現状下で成長する子供達はどの様な人生を送るのか？、一刻も早い停戦を願い、復活祭に改めて彼らの為に平和の祈りを捧げたいと思います

「二〇二三年度堅信受領者総会説明会報告」

前庭ならびに西側崖地プロジェクトチーム

ポウリーン田口知子

二〇二四年二月一八日、堅信受領者総会の前主日の礼拝後の聖堂にて「西側がけ地の安全対策に関する二〇二三年度の成果報告」を行いました。

説明会では、二〇二三年度に行った西側がけ地の地質調査・断面測量の結果と、そこから導き出される対策の方針をご説明しました。前回さかえでも書きましたが、北半分は勾配が少し緩く、災害の危険が低いこと、一方南側のショウホール裏側は急勾配で危険性が高く、隣地に土も流れる問題もあり、何らかの対策が必要であることがわかりました。調査結果を受け、私たちのプロジェクトとして、がけ地の安全対策は、最低限にするなら南側半分に集中してもよいこと、のり面アンカー工法（ノンフレーム工法）を行えば、東京都のレッドゾーン解除が可能であることがわかりました。

業務委託を受けた田口建築設計事務所としては、問題のがけ地を、日常的に人が入れる斜面に改修する方法を考えました。ショウホールを解体し、室外機を移設し、土を撤去し、勾配を緩くし、歩道をつくる案です。そのために重機が入る車路作成など、仮設工事が必要になります。がけ地を、人が管理できる明るい場所にすることを目指して提案書を作成しました。さらに踏み込んで、がけ地に擁壁を兼ねた半地下建築を建てる案も提案しました。聖堂の隣に、教会機能をサポートする建築があることの価値は大きいと考えました。

二〇二〇年に提案したA案、C案に続き、E案、F案という名前で提案を加えています。これで、がけ地および牧師館等の整備についての選択肢がほぼ出そろったと感じます。これから一年間、信徒・教役者の皆様に、今後進むべき方向を選択いただく年になると思います。

あらためてプロジェクトの目標や課題を問い直すことも必要かもしれません。大きな選択にあたって、今までわかってきた情報は可能な限りオープンにし、一緒に考えていただける時間をつくりたいと思っています。開催する信徒ワークショップやアンケートに、ぜひご協力のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

コイノニア

感謝をこめて

混乱の中で

リチャード倉辻昭男

全世界で猛威を振るった病、新型コロナ感染症によるパンデミック。私たちにとって未経験の事態の中、教会のいくべき姿を示していただいた、お二人のお働きに対する謝意はどのように語れば良いのか。何と言って良いか、最適な言葉が浮かびません。

この期間を振り返れば、礼拝を中心とした教会の様々な活動は制限され、私たちは「辛く、寂しい」時を過ごしましたが、Zoomやユーチューブといった手法を使った新しい活動なども開始され、教会の活動は続けられました。信徒も先生方も満足の行くものではなかったかもしれませんが、手探りの対応の中で「み言葉を伝える人」と「み言葉を受け止める人」の新しいつながりが生まれたのではないでしょうか。

いま、私たちは、コロナ禍を克服しつつあります。このトンネルを抜け出して新しい動きが少しずつ始まっているような・・・。そんな中で、お二人の先生方をお送りしていくわけですが、初めての経験の中で、多少の混乱もありましたが、確実に私たちは「一歩」前にふみ出していると思います。

下条先生、中村先生、聖アンデレ教会でのお仕事お疲れ様でした。そして、ありがとうございました。

主に感謝